青山国際政経論集 111 号、2023 年 11 月

研究ノート

落穂拾いの記

狩　野　良　規*

目　次

はじめに
1. 説教なし、モラルあり――フレデリック・フォーサイス『戦争の犬たち』
2. 1970 年代のマンタリテ――庄司薫『さよなら怪傑黒頭巾』、『白鳥の歌なんか聞えない』、『ぼくの大好きな青髭』
3. 諷刺喜劇の変容――つかこうへい・深作欣二『蒲田行進曲』
4. 家族は作るもの――是枝裕和『万引き家族』
5. 文学の真価――カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』
おまけ

はじめに

僕は 1986 年に、30 歳で青山学院大学に拾ってもらった。以来 38 年間、国際政治経済学部は、専門違いの、およそ不適材不適所の僕を黙認してくれた。その間、『青山国際政経論集』に載せてもらった原稿は今回を含めて 36 本。学部長・学長を歴任された某先生が「教員の同人雑誌」と呼んだこの紀要に、論文もどきを「研究ノート」として――いや、本当は「漫談」というカテゴリーがあれば、そこがよかったのだが――投稿してきた。

僕は、今日のように「査読論文でないと評価されない」なんて小賢しい風潮

＊　青山学院大学国際政治経済学部教授

のなかった時代に育った。人様にゴチャゴチャ言われずに、自分の好きなことを好きなように書きたい。そもそも、「評価」だの「貢献」だのは、僕の関心の埒外。僕が原稿を書くのは、すべて自己解放のためである。

なので、この査読のない、清々しき同人雑誌を有難く活用させてもらった。学部にも論集にも、ずいぶんとお世話になった。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。

で、2024 年 3 月の定年をひかえて、今回が最後の投稿となる。「落穂拾いの記」――タイトルのとおり、ずっと僕のネタ帳に入っていて、まだ書く機会のなかった作品についての解題である。

さても、立つ鳥跡を濁す漫談かも。お目汚し、ご容赦のほど。

1．説教なし、モラルあり――フレデリック・フォーサイス『戦争の犬たち』

国際派ジャーナリストからサスペンス作家となり、ベストセラー小説を連発したフレデリック・フォーサイスの第 3 作『戦争の犬たち』（1974 年）は、大学に入学してから読んだように記憶している。ドゴール暗殺を謀る一匹狼のスナイパーとフランス官憲との攻防を描いた『ジャッカルの日』（1971 年）と、ナチス親衛隊の残党を逃亡させる組織をドイツ人の若者が追う『オデッサ・ファイル』（1972 年）は、すでに高校時代に、それこそ夜を徹して読んだ。どの作品もスケールが大きく、しかし細部にいたるまで緻密にしてリアル、事実とフィクションを巧みに織り交ぜた、究極のエンタメ小説であった。

『戦争の犬たち』は、キャット・シャノン率いる傭兵隊が西アフリカ海岸のザンガロ共和国なる新興国に潜入し、独裁者ジャン・キンバを亡き者にしようとする物語である。

プロローグは、内戦が敗北に終わったアフリカの某国から黒人の将軍が脱出するのを、シャノンら傭兵たちが見送るエピソード。

本篇に入ると、ザンガロの奥地にある水晶山で錫（すず）の鉱脈が発見され、サンプルがロンドンへ送られる。その分析結果を読んで、マンソン合同鉱業の会長、

ジェームズ・マンソン卿は驚く。プラチナが含有されている。

マンソンは株で富を築いた。1950年代にはアフリカ諸国独立の気運をいち早く察知し、新たな権力者たちと親密に交わって、採掘権を獲得した。そのシティの大立者が、5年前に独立はしたものの、経済は壊滅状態、医者も技術者もいない、独裁者に支配された小国に眠る“お宝”を見過ごすはずがない。マンソンは部下に、ヨーロッパ一の傭兵を探せと命ずる。

白羽の矢が立ったのが、北アイルランド出身のキャット・シャノンであった。彼はさっそくザンガロに入国して予備調査を行なうと同時に、自分の雇い主がマンソンだと知る。一方のマンソンは、キンバを殺し、彼と仲たがいした国軍の元総司令官ボビ大佐を後釜に据えよう、また実際は営業を停止している目立たぬ会社の株を安く買い取り、ボビにその会社に採掘権を与えさせる計画を立てる。すなわち、自らプラチナを採掘するのではない、会社の急騰する株で儲けようというのである。

シャノンは旧知の傭兵4人とキンバを襲撃する準備を開始する。さらにマンソンの一人娘ジュリーに接近し、父親のことをあれこれ聞き出す。ベッドの中で彼女に語る――戦争を起こすのは傭兵ではない、平和を口にしながら己の利益しか考えない奴らだ、権力者は現在に満足せず、金でさらなる権力を買う、体制は強い部隊に与(くみ)する……

フォーサイスはまた、武器産業の現実についても吐き捨てる。兵器の売買は麻薬についで儲かる商売だ、第二次大戦後、自前の兵器産業をもつことが国威の発揚につながった、アフリカにある武器の95％は、外敵にではなく、自国民に向けられている、と。

そう、戦後アフリカ諸国は西欧列強による植民地支配を脱して、次々と独立を果たした。1960年には17の黒人国家が誕生し、「アフリカの年」と呼ばれた。だが独立はハッピーエンディングにあらず。むしろ新たな不幸の始まりであった。未熟な権力者たちによる暴政、その裏にちらつく旧宗主国の影、資源を狙う先進国の資本家たち……

今でも覚えている、僕が小学生のころ、アフリカの貧困の象徴としてよく見

せられたビアフラの子供たちの写真。痩せ細り、骨が浮き出て、お腹だけが膨らんだ餓死寸前の幼き者たちの姿。ナイジェリア南東部のビアフラは1967年、分離独立を宣言して内戦となる。戦闘は膠着状態となったが、兵糧攻めに遭ったビアフラは2年半後の70年、ついに降伏する。

その惨状を現地でつぶさに目撃したのが、従軍記者時代のフォーサイスであった。僕は彼のルポルタージュ『ビアフラ物語』（1966年・77年）を、たまたま2022年3月、ウクライナ戦争開戦直後の時期に鬱々（うつうつ）としながら読んだ。彼は同書の中で、イギリス政府がビアフラの子供たちへの救援物資を届ける業務を妨害したと批判する――兵糧攻めの黒幕はイギリス政府だ、中立を唱えながら、陰でナイジェリア政府に武器と物資を供与し、諸外国にはアフリカがバルカン化してしまう、英連邦はイギリスの勢力圏だから手を出すなと言い放った。そのため、ビアフラは1968年の1年間だけでも100万人の餓死者を出した、と。

プーチンのような蛮行を、イギリスのハロルド・ウィルソン労働党政権もやっていた。

フォーサイスはイギリス政府の嘘と偽善を告発して失業し、「小説に手を染め、『ジャッカルの日』というお話を書いた」（『ビアフラ物語』）。有名なエピソードは、フォーサイスが実際に傭兵を雇って赤道ギニア共和国の独裁者、マシアス大統領を葬ろうとした話。作戦は結局、スペインで武器を積み込む段階で失敗、『ジャッカルの日』の印税は露と消えた、と（角川文庫版『戦争の犬たち』の篠原慎によるあとがき参照）。

ビアフラ人に新天地を与えようとしたそのクーデター計画と酷似しているのが、『戦争の犬たち』だというのだ。同小説の後半は、シャノン率いる傭兵たちがヨーロッパ各地を飛び回って闇商人たちから武器を調達し、船で西アフリカへと向かう様子が、詳細に、慎重に、クールに描かれる。その長さに比してあっけないほど短いのが、夜陰に乗じて傭兵たちがザンガロの大統領官邸を襲撃するクライマックス・シーン。えっ、これで終わっちゃうの。そして、ボビ大佐が新大統領になると思いきや……

終幕近くでシャノンがマンソンの部下に語る――俺はアフリカで多くの子供たちが餓死するのを見てきた、誰がやったのか、独裁者か、北の政治家や外務省の役人たちか、いやその背後に合法的に儲けようとしているあんたたちみたいな人間がいるんだよな。

文学に説教は禁物である。学校の授業じゃないんだから。しかしフォーサイスのサスペンス小説はエンタメに徹しながら、その物語の裏側には彼の倫理観が色濃くにじむ。それは傭兵の地べたを這(は)いつくばるような目線で綴る、アフリカを、第三世界を食いものにしている先進国の資本家たちへの憤り。

プロローグとラストにチラリと登場するドクター・オコエのモデルは、フォーサイスが敬愛してやまないビアフラ独立運動の指導者、エメカ・オジュク将軍だという。

※引用は、『戦争の犬たち』（篠原慎訳、角川文庫、1981 年）と『ビアフラ物語』（角川選書、篠原慎訳、1981 年）より。

2．1970 年代のマンタリテ――『さよなら怪傑黒頭巾』、『白鳥の歌なんか聞えない』、『ぼくの大好きな青髭』

庄司薫の青春小説、赤黒白青の 4 部作。第 1 作の『赤頭巾ちゃん気をつけて』（1969 年）については、すでに書いた（拙著『ポジティブシンキングにならないために』所収）。

「過激な 1960 年代」のクライマックス、東大安田講堂に立てこもった学生たちと警察機動隊の攻防戦のあおりを受けて、1969 年の東大入試は中止となった。名門日比谷高校の 3 年生、作者と同名の主人公たる薫君は、梅の咲くころ、突然やることがなくなってしまった。その頭脳明晰にして保守的な考えを持つ童貞の若者が、甘ったれた口調でブツブツ、グダグダと自らの人生のあり方について独り言つ、なんともゆる～い小説。

69 年 3 月に執筆され、5 月に発表されて大ベストセラーとなり、7 月に芥川賞を受賞した。本人は否定しているが、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』に、ストーリーも道具立ても饒舌な文体もよく似ていると問題視もされた。

へへエ、サリンジャーの小説の“本歌取り”だと認めてしまえばいいのに。けれども、その“青春小説のバイブル”と異なるのは、薫君があちらの主人公、落ちこぼれのホールデンと違って、エリート予備軍の健全な若者だという点。それひとつだけで、両者はまったくの別物である。

僕は高校時代、サリンジャーを好まず、しかし庄司薫を愛読した。彼のトレードマークたる黒のとっくりセーターを着、自分の文章に“僕”なる一人称を使うようになったのも、どうやら彼の小説からの影響だったみたいだ。

いったい青春小説なんて代物は、人生の折り返しを過ぎてから再読すると、「なんでこんな駄作に感動したんだ」とがっかりすることも多いのだが、還暦を過ぎてから4連作を読み返すと、これがどうしてどうして、まんざらでもない。『赤頭巾ちゃん気をつけて』だけではもったいないので、他の3作も俎上に載せておきたくなった。

*

薫君シリーズの第2作『**さよなら怪傑黒頭巾**』(1969年)は、69年5月の連休に時を設定している。『赤頭巾ちゃん気をつけて』のおよそ3カ月後の物語である。

冒頭は朝7時、薫君が目を覚ますと、「これは男にきり分らないことと思うのだが」、「要するにタッチャって」いる――と、ヘッヘッヘッ、18歳の健康な男の子の朝立ちの話から始まる。薫君は英単語集や『毛沢東語録』で気をまぎらそうとする。

薫君はマルクスが好き、とも。シェイクスピアを暗誦し、貧乏して子供たちに次々と死なれながら、大英図書館に毎日通い、顔を見たこともない人たちの幸福を考えつづけた革命家。

3日続きの連休の真ん中の日曜日、ラジオのニュースは「どっとくり出した行楽客」のことを伝えている。でも、高校は卒業したが、大学へは行かなかった秀才は、何もすることがない。彼の恋人というか幼なじみの由美は女子大の仲間と旅行に出かけて不在だし。

と、薫君は宅浪を決め込んだが、力むばかりで何をどう頑張っていいのかわからない。自己喪失（アイデンティティ・クライシス）状態。プロ野球解説者なら「肩に力が入っちゃ長島でも打てませんね」、「王くんもああリキんじゃいけません」というところ。問題はどうやって「肩の力を抜くか」だ。

そこに下の兄貴の友だち、医者の卵の山中さんから、今日１時からの結婚披露宴に出席してほしいと電話がかかってきて、薫君のとんだ１日が幕を開ける。

彼は１カ月前、たまたま銀座で山中さんと彼のフィアンセと会っている。二人は結婚式のことでもめていたらしい。新郎は皆と同じような普通の結婚式をしたいと言い、新婦は「あなたはそうやって、実は自分も馬鹿になったふりをしたいんです」と。なにか事情がありそうだった。

また、昨日はクラス会があったが、50 人のクラスメートの半分も集まらず、二次会で銀座に繰り出せば、5 人連れの女の子たちに逆にハントされたが、しゃべるほどに調子が合わなくなる。日比谷の優等生、大人ぶっても力むだけで様にならない。

この小説、ストーリーでぐいぐい引っ張っていく読み物にあらず、薫君と一体化した作者の庄司薫が綴る小ネタのグダグダ話が面白い作品である。

と、披露宴の会場は、日比谷高校のすぐそばのヒルトンホテルである。友だちの革命派に言わせれば「ベーテー」――ヴェトナム反戦運動華やかなりしころのなつかしきことば、アメリカ帝国主義、略して米帝（ベーテー）――の手先たるホテルで、わざわざ式を挙げる。

聞けば、山中さんは大学紛争時に相当騒いだ青医連のメンバーだったとか。なのに、教授の仲人で大病院の娘と結婚するという。そう、医学部は東大紛争の火元、主義主張以前の人間関係がひどくすさんでいて、新郎は「敵前逃亡の裏切り者」扱い、いつサンパ（三派、全共闘）が披露宴に殴りこんでくるかとビクビクしているのである。

披露宴が始まる。薫君は型通りの、普通の祝福にホッとしたり、お義理の拍手にカチンと来たり。新郎側の参列者はブンヤに役人にサンパの弁護団と、ま

あ、東大の卒業生たち、インテリのエリートばかりのチンなる一団である。

薫君のきょうだいは、『赤頭巾ちゃん気をつけて』によれば、30いくつかの兄を筆頭に大体2歳おきに男・男・女・女、そしてずっと遅れてポツンと薫君。すなわち、終戦時に小学校2年生だった庄司薫は、薫君ではなく上の兄貴たちの世代に属する。父親は大正リベラリスト、母親は戦後民主主義の信奉者、優秀な男3人兄弟はずっと公立の学校で、「典型的な六三三制戦後民主主義教育」を受けた。

とくに日比谷高校（旧府立一中）は、目の前にそびえたつ国会議事堂を眺めながら兵（つわもの）どもが、将来天下国家を背負って立つ人材になろうと勉学に励み、都立高校が学校群制度を敷くまでは東大合格者トップを誇っていたナンバースクール。おっと、僕が通った両国高校（旧府立三中）は、同じナンバースクールでも、国政の中心からちょいと離れた下町にあり、芥川龍之介などの文人を輩出、卒業生に政治家がほとんどいないことをむしろ誇りとした。

さらに庄司薫は、日比谷高校時代は芸術派の総帥的存在だったとか。つまりは、前作で存在感を示した、薫君の親友で小説家志望の小林も、作者の分身にあたる。ところが庄司は東大では法学部に進み、丸山眞男門下だった。

だから、『さよなら怪傑黒頭巾』の薫君の独り言の中に、文学と政治学の双方から作者が自問自答する「民主主義という知的フィクション」への考察が潜んでいる。いや、そんな“隠された議題（ヒドゥン・アジェンダ）”なんて知らなくても、ゆるゆると楽しめる青春物語ではあるのだが。

小説の後半は、薫君が披露宴にいたノンちゃんとアコちゃんと一緒に銀座、さらに六本木へ流れていく。昨日のクラス会と同じコース、“つわものどもの夢のあとめぐり”。ノンちゃんは、山中さんの義妹で、お茶大付属というから才女である。しかし、まだキャリア・ウーマンやら男女同権やらという時代ではない、どんなに頑張っても結局は結婚相手の男しだいなんだと薫君が同情すると、ノンちゃんは声をたてずに泣いている。アコちゃんは「あたし、オナニーばっかりしてんの」。薫君は「男の子ってすごいんでしょう？」と聞かれて、たじたじ。

でも、せっかく親密な雰囲気になったのに、童貞の薫君は何事もなく帰宅し、そのまま眠ってしまう。と、夜中の2時、悪酔いした兄貴たちが帰ってくる。その中に二人の兄が尊敬する先輩の中村さんがいる。彼は優秀で誠実な政治学者、だが70年（安保）を前に海外へ留学するとか。山中さんの結婚と同様の「敵前逃亡」?!　泥酔した中村さんが若き薫君に、「ぼくはいま、ぼくの大好きな怪傑黒頭巾と別れるところなんですよ」と。彼が子供のころから憧れていた、危機一髪というと必ず現れる英雄である。

兄たちは牛乳をゴクゴク飲む。へへエ、悪酔いには牛乳がいいんだよねえ。でも、冷蔵庫にあった牛乳はすぐになくなってしまう。薫君は夜明け時、兄たちのために牛乳の配達を待つべく、家の玄関の外にしゃがみ込むのであった。

と、ここで思い出すのは、前作で兄貴が薫君に、悪名高き東大法学部は「みんなを幸福にするにはどうしたらいいのかを考え」るところだと語っていた挿話。また薫君は、兄の書いた「馬鹿ばかしさのまっただ中で犬死しないための方法序説」なる論文を処世訓よろしく読んでいた。『さよなら怪傑黒頭巾』は、そんな仰ぎ見る兄貴たち――すなわち作者庄司薫と同世代のインテリたち――が、「人生という兵学校」で青雲の志をくじかれながら悪戦苦闘する姿を、年の離れた弟の目線で描く。

それはポスト全共闘世代のエリート予備軍の“高貴なる義務（ノーブレス・オブリージュ）”といおうか、いや、1975年に大学に入学した僕からすれば、70年代の心性（マンタリテ）ともいえる。それを薫君シリーズの中で、最もさりげなく、力まず、優しく綴った『さよなら怪傑黒頭巾』が、僕は4連作のうちでいちばん好きだ。

もっとも、下町の貧乏人の生まれで両国高校を卒業した僕にはノーブレス・オブリージュはあまりない。僕がめざしたのは“高等遊民”、そこは庄司薫＝薫君とはちょっとマンタリテが違うのである。

*

『**白鳥の歌なんか聞えない**』（1971年）は薫君シリーズの第3弾だが、時系列的には『さよなら怪傑黒頭巾』より前、1969年3月の6日間の物語である。

大学入試が終わり、香水をつけた由美が、斎藤さんちのモクレンが咲いたと言って、薫君を誘いだす。春だ。

二人は散歩をして、たわいない話をして、おしるこ屋に行く。ウフッ、清らかな関係。

もうひとつ、春が来たのかもと思わせるのは、件(くだん)の芸術派たる小林が女の子にのぼせ上がって、駆け落ちすると言いだした椿事である。だが、それも未遂に終わり、彼は薫君の家に転がり込む。そんな派手で目立つ小林に対して、引っ込み思案の横田もいい味を出している。彼は薫や小林のように、自分と世界の関係を考えれば己の最善の生き方が見つかるとは思っていない。とりあえず自らの平凡な人生にとっての悪いことに今から備えておき、あとは何事も軽く軽く生きる、一刻も早く隠居したいんだ、と。

そうした高校3年生たち、力めば力むほど格好いい行動にいたらず、しかして馬鹿ばかしいことも多かろう人生の「持久戦」を戦って犬死しないための方法序説をあれこれ考える。僕も高校時代、薫君と彼の友人たちの話を読みながら、どうやって若いうちに実力をつけるか、いかに時間を稼ぎながら知性を磨くかと思索した淡い記憶がある。

で、由美は薫君とデート中に、彼女の先輩の小沢さんと出会う。黒いパンタロンスーツに白いタートルネックのブラウスを着たすごい美人、高校生からすれば息を呑む大人の女性である。由美は小沢さんと彼女のおじいさんの家に行き、それからちょっと様子が変わる。

次に会った時、由美は薫君の手をそっと握りしめ、真正面から彼を見つめる。さらに薫君は、死んだ飼い犬のドンの代わりにと、縫いぐるみの犬をプレゼントされ、なんと耳の裏のジッパーを開けると、「あなたがとてもとても好きです」と書かれたカードが入っている。生まれて初めてのラブレター、しかしなんか変だ、薫君は奇妙な苛立ちを覚える。

夜の散歩中、今度は小沢さんに会う。彼女の車の中から目を閉じたくなるような花やかな香水の匂いがする。彼女におしるこ屋の裏にあるバーに誘われる。小沢さんは今、病気で先の短い祖父の本の整理をしていると語る。

彼は、薫君の兄に言わせれば、大変なジイサンだとか。野球で敬遠のフォアボールってのは、かなりいい手だ、偉い人にはこっちに十分な力がないうちは、うかつに近づくな、むしろ逃げて逃げて逃げまくれ、と。そう、その逃げまくれは、兄貴の書いた例の方法序説にも載っていた戦略である。早まってはいけない、人生は持久戦だ。

薫君は小沢さんとおじいさんの家へ行く。入ると、電気の消えた暗がりの中から、古本屋のような紙の匂いがしてくる。膨大な量の本、半分は原書、さまざまな言語で書かれ、全部読んだあとがある、線を引いたり注釈があったり。もうじき 80 歳の祖父は、書物だけでなく音楽も美術もおシャレも食べ物も、およそ人生をラクラクと楽しんだ人だった。それほど本は書かなかったけれど、彼自身が作品なのよ、彼の業績や作品は彼という人間の脚注みたいなもの、と。

格好いいなあ、まさに高等遊民！　僕の英文学の師匠も生涯一冊も単著を書かなかった教養人だった。それに比べて僕は……

大きな墓場のような暗闇の中で、小沢さんが寒いから抱いてくれと、薫の首に手をまわし、彼の唇に彼女の唇を重ね合わせてくる。ほうほう、だが薫君はつっ立ったまま考えをまとめようと努める。へへエ、ここは考える場面じゃないだろうに。小沢さんはやがて力の入りきらない薫君から体を離し、もういいの、とつぶやいた。あ〜あ、せっかくのチャンスだったのに。

しばらく後のページに、僕の好きなやりとりがある。薫が家に来た小林に、塚原卜伝の話をする。ワッと斬りつけられると、サッとナベブタで受ける、達人ほど刀を抜かない。だけど、「ナベブタでサマになるまでが大変なんだな」と。一方の小林曰く、虎のいる檻に、ある時武蔵が入っていくと、虎は全身総毛だって震えだした、ところが沢庵が中に入ると、虎は薄目をあけて見ただけで、平気でグーグー眠り込んだ。そして、この話、武蔵がかわいそうじゃないか、と。達人になるまで、抜き身ギラギラで戦わなくてよくなるまで、どうやって厳しい現実の中で修行するか。

また、知性というのは知識だけじゃない、知識を身につける目的は、それを

使うだけでなく、使わないで済ますためでもある、と。行動の伴わない若者二人、けれども考えることは人生の本質を捉えて、とても格好いいのだ。

夜、薫君が由美の家に呼ばれる。小沢さんがひどい風邪で寝込んでいる。おじいさんの容体が悪い。電話のベルが鳴ると、死の知らせかと、皆が白鳥の歌を聞こうというように、耳をすます。由美と薫君が暗い部屋で二人きりになる。薫の腕の中で由美の息づかいが激しくなる。彼は唇を彼女の唇に強く押しあてる。由美が小さな声で、「抱いて」、「好きよ」と。おっ、今度は本命相手だ、そこだ、行け、薫！　しかし、薫君は胸の奥のいちばん深いところからしぼりだすような思いで、これではいけない、今はいけない、と。薫君の後ろから衣ずれの音が聞こえ、由美がストッキングを脱いでいる気配がする。薫は激しい興奮に体中を震わせる。けれども、こんな、死の影を怖れるような形で、死から逃げようとでもするような形ではいけない。服を脱いだ由美がベッドに身を横たえるのを全身で感じとる。彼はかすれた声で「だめだよ」と言い、彼女は「どうして？」と聞いてくる。薫が目をつぶると、彼女の白い裸身が想像され、突然好きだと叫び、彼女を狂おしく抱きしめる自分を見たように思った瞬間、「目がくらむような快感のうちに身動き一つできぬまま激しく射精して」しまった。あれま。

階下で電話のベルが鳴る。老人が亡くなった。

庄司薫がみんなを幸福にするにはどうしたらいいのかを問い、そのためには全共闘による「ゲバルト（暴力）」みたいな直接行動ではなく、たおやかな知性に頼る持久戦を提案し、しかし己の信ずる知性を象徴する老人の死には抵抗してみせた。若いうちから、そんな達人の域に達しようとしなくていい、思いきりもがけ、と。

由美の口癖を使えば、「恥ずかしくて、舌かんで死んじゃいそう」な話だが、しかし実力に裏打ちされた優しさを希求する薫君には、さんざん馬鹿ばかしさのまっただ中で逃げて逃げて逃げまくった僕も、もう一度青春時代の純粋な大志を振り返りたくなる。ピュアな春風が吹いて、モクレンの香りが漂ってくる。人生の春の物語である。

＊

『**ぼくの大好きな青髭**』（1977 年）は、大学に入ってから読んだ。庄司薫が書かなければならなかった、そして書きたかった小説であろう。だが、3 作がいずれも大ベストセラーとなった芥川賞作家は、完結編の執筆に手間取った。時間が空いたせいか、結びをつけなければと若干力んだせいか、前作までとはちょっと違うんだよね。タッチかなあ？

僕は読了したのか、読みさしで終わったのか、記憶がない。なんとなく違和感が残っている。だが、今読み返すと、ははあ、これはこれで庄司薫の青春文学のライトモチーフが如実に反映されている。やはり彼の「民主主義という知的フィクション」への答えのない思索が詰まっていると納得した。

時は 1969 年 7 月 20 日の午前 10 時少し過ぎ。そう、アポロ 11 号が人類の夢を乗せて、初めて月面に着陸した日として歴史に刻まれている、その当日。薫君は、開店直後の新宿紀伊国屋のエスカレーター昇り口の脇に、サングラスに麦わら帽子、古い昆虫網を抱え、鼻の下に八の字型の髭をつけた奇妙な姿で立っている。

薫君のクラスメートの高橋が自殺を企った。目下生死の境をさ迷っている。父親は一流銀行の重役、クラスでも影の薄い、暗い表情の男で、ショーペンハウアーを読み、フルートを吹く。週刊誌の記者が薫君に高橋のことを聞きたいと言ってきて、紀伊国屋の中の喫茶店で会うことになった。

変装姿の薫君は、それによっていつものお行儀のいい優等生から「安全など省りみない真摯な革命家」、「知性でなく感性に生きる純粋な魂」になろうとした。しかし、芸術関係者風のパーマをかけた長髪の記者は、店に入った薫にすぐに気づき、変装にもまったく関心を示さない。二人のヒッピー風の女の子に話を聞いている最中。青髭とシヌへのことを教えてくれたら 5 千円払うから、と言って。この小説、青髭とは誰かという推理仕立てになっている。

薫君に大学生風の 3 人組が近づいてくる。男 2 人に美人の女 1 人。彼らも青髭を探している。女は、妹が妊娠した、相手は青髭としか言わない、と。彼

らは「十字架回収委員会を研究する有志」と称する。なんだ、そりゃ？　激しく変化する世の中にあって、正義でも善でも真理でも、大きな理想を持つことが不適応の最も現代的な典型だ、そういう古ぼけたでかい十字架をかついでよたよた歩いている人たちを救い出す集団を研究している。他人の不幸を見逃していられない、人類を救済するんだという大志を抱きつづける不幸。青髭はその十字架をかついでいる男なのか、それとも回収してまわっているのか。ヘッヘッヘッ、なんかこんがらがってきたぞ〜。

そして、彼らは自分たちもそんな不適応型であるくせに、何事にもあっさりと適応してしまう日和見型でもあると語る。大学を卒業すれば、立派な社会人としてお仕事を始めて、健全な家庭を築くであろう、と。薫君は彼らを、根深いところで自分の仲間だと感じる。

次に薫は、やせたゴリラがサングラスをかけたようなオカマの青年に、シヌへがいるからと歌舞伎町の奥の薄暗い店に連れていかれる。「葦舟（あしぶね）」と書かれた木の看板がある、カビとアルコールと煙草の匂いがする店。そこで聞いたのは、勉強が嫌いでバカな女の子がマスコミに踊らされて、テレビで学校批判をさせられ、結局使い捨てにされて、ガス自殺した、その時高橋が本気で怒っていて、ちょっと素敵だった、と。

美少年のシヌへが来た。彼曰く、高橋は葦舟ラー号の船長だった。そう、パピルスで作った古代の舟を復元したラー号で大西洋を横断しようとした話が、1969 年当時マスコミに報道されて話題になった。でも、アポロ 11 号の打ち上げと重なったせいでしだいに忘れられ、とうとう沈んでしまった。しかし、葦舟は俺たちの方が先だった、あのラー号は俺たちの真似をしたんだ、と。また、俺たちが狙われたのは、ほんとうの夢を持ったからだ、夢と情熱と可能性でいっぱいのすばらしい若者みたいにマスコミが書けば書くほど、俺たちはメチャクチャになってしまった、とも。

そういえば庄司薫のエッセイ集に、夢を食べ尽くす大食漢のバクをいかに飼い慣らすかを論じた『バクの飼主めざして』（1973 年）があった。それは、赤頭巾ちゃんが気をつけなければいけない「若さという名の狼」について綴った

『狼なんかこわくない』（1971 年）とともに、薫君 4 部作の“攻略本”ともなっている。若者の夢と厳しい兵学校たる現実との相剋。

薫君はシヌヘを高橋が入院している病院に連れていく。紳士然とした彼の父親が話す。息子は農薬を飲んだ、命をとりとめても廃人になる可能性が高い、戦争で友達がたくさん死んだから慣れているつもりだったが……青髭という人物に会って、一言礼を言いたい、私が息子を戦わせたのかもしれない。高橋氏は、言われるままに息子に金を出したとも語る。

歌舞伎町の店に戻った薫に、シヌヘが話す。俺たちの葦舟、俺たちの共同体を作ろうといった計画には金がかかる。先立つものはやっぱり金だ。ところが病院でわかった、高橋の持ってきた金の出どころは父親だった、父親が青髭だったってわけだ、馬鹿馬鹿しい。

店に、暗く化粧をしているが、中学生のように若い娘が入ってくる。件の妊娠した妹だ。もうすぐ家へ帰る、でもその前にもう一度青髭に会ってから、と。えっ、青髭は実在するのか？　二人は葦舟を出て、真夏の夜の新宿の街を歩く。そして、新宿御苑に忍び込む。突然広やかな野原が銀色に輝いて現れる。

1960 年代末の新宿。そこは大学紛争のデモ隊が集合したところ、ギターに合わせて反戦フォークが歌われ、ヒッピーもオカマもいて、アングラ演劇が盛んな、若者文化の震源地。そんな賑わしい街の真ん中に、巨大で静謐（せいひつ）な森があった。

妊娠した少女が言う。葦舟を成功させようと必死だった、あたしみたいな馬鹿で弱い子を助けようと始めたのだから、でも無理なのはわかっていた、勉強が嫌いで才能のないあたしのような子はおとなしくお行儀よく生きるしかない、「人間が好き勝手に生きるってことは、頭がよかったり力があったり才能があったりする人にだけ許される贅沢なんでしょう？」

高橋は少女に、結婚して一緒に赤ちゃんを育てようと言ったという。でも少女は明日、入院して中絶手術を受ける、と。あたしはもう一生分の贅沢をしたから、これからはいい子になる。お腹の子の父親は誰だかわからない、お金のためにいろんな男の人と付き合ったから。

新宿の巨大な夜空が青髭にも見える。「あたしたちの素敵な味方で素敵な敵。あたしたちが結局ひどく魅入られて、そしてひどく憎んだこの大きな大きな世界……」

クラスでは目立たない人畜無害な男だった、しかしそれでも日比谷高校の秀才だった高橋が、「他者救済」に乗りだし、だが「優勝劣敗」の現実に平手打ちされる。劣敗しそうな人たちをいかに助けるか、優勝組が悩みもがく。万人の幸福を希求し、他者との連帯をめざす民主主義は、やはり知的フィクションにすぎないのか。

自分は父親から金をもらい、しかし少女が葦舟のための資金を体で稼いでいたと知った高橋の慚愧(ざんき)。

薫君は夜中の 12 時、待ち合わせた由美と小林のいる紀伊国屋前へ急ぐ。薫が「この青髭を好きになるなんておれに出来ると思うかい？」と荒っぽく言うと、由美はあなたなら出来るわよと、薫を甘やかすようにささやく。

人は青春の夢を、その後の兵学校生活に入ってからも、ずっと好きでいられるだろうか。

3. 諷刺喜劇の変容———つかこうへい・深作欣二『蒲田行進曲』

薫君が青髭を探す冒険に出発し、そして帰りついた新宿の紀伊国屋書店の本店ビル、その 4 階に紀伊国屋ホールがある。僕が大学生時代に出会った最もインパクトの強い芝居のひとつは、そこで見たつかこうへいの『熱海殺人事件』（1973 年、紀伊国屋ホール初演 76 年）であった。

善玉の刑事が凶悪な犯人を追う勧善懲悪の作品にあらず。国家権力の犬たる警官が、犯行を自供しない労働者階級の容疑者と一緒に、熱海で起こったチンケな殺人事件を新聞で大々的に報じられるドラマティックな事件に仕立て上げるまでを描くブラック・コメディ。開幕から終幕まで、場内は爆笑の渦。コアな演劇ファンだけでなく、ふだんは芝居など見ないミーハー族をも熱狂させ、1970 年代の一大若者カルチャーとなった。

かくいう僕も、ガールフレンドを誘って紀伊国屋ホール詣でをしたが、その

笑い転げた芝居のどこがなぜ面白いのかは、彼女に説明できなかった。そこには、戦後民主主義社会（知的フィクション？）を生きる日本人の偽善性をメッタ斬りにする激烈な諷刺があったのだが。そして解題が書けたのは、そのおよそ 40 年後だった（拙著『現代を知るための文学 20』所収）。

で、今回は映画『蒲田行進曲』を取り上げる。舞台初演（紀伊國屋ホール）が 1980 年、深作欣二が監督した映画版はその 2 年後の 1982 年。長く続いたつかこうへいブームに陰りが見えはじめた時期に制作された、つか原作の最高傑作映画、しかしこの映画の大ヒットによって、彼の黒い喜劇（ブラック・コメディ）は変容し、ふたたび 70 年代の輝きを取り戻すことはなかった。

レトロなスチール写真と大ヒットした主題歌を背景にクレジット。東映京都撮影所では今、『新選組』撮影の真っ最中である。だが、土方歳三役のスター俳優、銀ちゃんこと倉岡銀四郎は浮かない顔。ラストシーン、池田屋の階段落ちで巨大な階段から落っこちてくれる俳優が見つからないという。「人命尊重、暴力否定のご時世」で会社の OK も出ない、監督は「平和日本にふさわしい、せこ〜い階段に作り替えようか」と。

銀ちゃんはとにかく派手好き。車は「王将」と将棋の駒の絵がボディに描かれているキャデラック、ネオンをチカチカさせて。上着も銀色でむろん派手。演じるはつか作品の常連、風間杜夫。また、銀ちゃんの率いる大部屋俳優たちのひとり、ヤスこと平岡安次役は平田満、つかの劇団旗揚げ時からの子飼いの役者だ。つか芝居の常、俳優たちのセリフもそのしゃべり方も、派手でオーバーで臭い。

ヤスがぐでんぐでんに悪酔いした銀ちゃんを彼のマンションに連れ帰ると、そこにいたのは彼の恋人の小夏。扮するは、美人女優としてすでに売れっ子だった松坂慶子。彼女はこの映画のために連れてこられたスターである。

小夏は妊娠 4 カ月、でも銀ちゃんは若い娘に心移りしている。ヤスに小夏と一緒になってくれと頼む。厄介払いってわけだ。しかしヤスが引き受けると、それはそれで怒りだし、ヤスの前で小夏を抱きはじめる。おっ、松坂慶子がおっぱいを出している。

ヤスは失意の小夏に、「がんばりますから、努力します、あなたに嫌われないように、3日いれば情も移ります」と。ただただ優しいだけで、才能なく、うだつのあがらない大部屋役者のどうしようもなさ。

小夏が妊娠中毒症で入院する。桑田佳祐作詞・作曲、中村雅俊が歌った挿入歌「恋人も濡れる街角」が流れる。この歌も流行(はや)ったなあ。ヤスは危険な役を次々と引き受ける。「これ（小指）がこれ（腹が大きくなった）なもんで」。はてはビルから飛び降りるスタントまで。役者バカ、才能もないくせに。

小夏は銀ちゃんと別れ、ヤスと結婚する決意を固める。ヤスが小夏と九州の人吉に帰省する。駅に歓迎の人だかり、ブラスバンドが主題歌を奏で、チアガールが踊る。ヤスが美人女優の嫁を連れて帰ってきた。だが母親は、お腹の子がヤスの子供ではないことを、すぐに見抜く。「ヤスのどこに惚れた？」、「うちの子を裏切らないでくれ」と。小夏は「一所懸命やりますから、許してください」。その夜、小夏はヤスと結ばれる、「銀ちゃんって、どんな顔してたっけ」と言いながら。好きな男を忘れるために、好きでもない男と結婚する。切ないなあ。この場面、戯曲にはない映画の挿入シーンである。

だが銀ちゃんは小夏と寄りを戻したくなり、4カラットのダイヤモンドを小夏の指にはめる。3千万円もした、マンションを売っぱらった、と。自分勝手もいいとこ。観客は必ずしも銀ちゃんに共感しないだろう。スターに同化できない、そう、ブレヒト的ってやつだ⁈　小夏は「女にはいつも一緒にいてくれる人がいちばん」と言って、彼への未練を断ち切る。

すると、突然ウェディングマーチが鳴り響き、池田屋の、13階段の3倍ある階段のセットがバージンロードに変わり、その上で白いタキシード姿のヤスが待っている。唐突、アンチリアリズム、舞台的、へへエ、これもブレヒト的というべきか。

ヤスはスランプの銀ちゃんを見るに見かねて、大階段から転げ落ちる役を引き受ける。銀ちゃんはさすがにヤスと目を合わせられない。ヤスは酒を飲んで、荒れる、暴れる。スターと大部屋俳優、サドとマゾの関係である。その二人の間に小夏が入ってきたわけだ。いったい弱い人間ほど、強い者ではなく、自

分よりもっと弱い者にきつく当たる。いじめの構造。ヤスは小夏を殴る蹴る。「何が不満なのよ」、「俺にわかるかよ、万年大部屋のこの俺によ」。

戦後の民主主義は“個の自立”を標榜し、民(たみ)がそれぞれ自己実現して自らの主(ぬし)になっている、そんな人間の集合体こそが真の民主主義だと唱えた。しかし、民衆は常にヒーローを、自分たちが依存できる英雄(ヒーロー)を待望している。つかは弱い者面する弱者が大嫌いだ。自らの足で立とうとしない大衆に唾を吐く。つかの大衆に対する、そして自分の生きている戦後日本社会に対する嫌悪。

舞台は大衆を象徴する万年大部屋俳優を辛辣に、猛毒を込めて笑い飛ばす、日本には珍しいヨーロッパ流のブラック・コメディであった。つかは観客をノンストップで爆笑させつづけなければ気が済まず、しかし自分は人を笑わせるために芝居を作ったことはないとも宣(のたま)う。彼は悪意に満ちた喧嘩腰の諷刺喜劇を書いた。

けれども深作は、小夏に、そして映画全篇に哀愁を漂わせて、“原作の精神”をはずしてしまった。でも、そんな人情喜劇の方が、日本人には受けるんだよねえ。

階段落ち撮影の当日、外には救急車が待機している。新選組が尊王攘夷派の志士を京都の池田屋に急襲するクライマックス・シーン。銀ちゃん演じる土方歳三が大階段を一歩一歩登る。ヤスたちが後ずさりする。銀ちゃんが階段を登りきったところで、ヤスが斬りつける。銀ちゃんが斬り返し、ヤスが真っ逆さまに落ちてゆく。CG のない時代の映画。

傷だらけのヤスがふたたび階段を這(は)い上がる。上では銀ちゃんが「上がってこい」と絶叫する。しかしヤスは途中で「銀ちゃん、カッコいい」とつぶやいて気絶する。

ヤスは大衆そのもの、自分の足で立てず、夢をヒーローに託す、だがそのヒーローも銀メッキという痛烈な皮肉。

21 世紀の今日、つかの作品は相変わらず人気の演目でたびたび上演されるが、しかし大笑いできるただの毒舌芝居になってしまった感がある。彼の“隠された議題”はもう時代遅れなのか。作り手も観客も感性が変わってしまった

と思えてならない。

※ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒト（1898-1956 年）は、観客があまり主人公や話の筋に共感・同化しすぎると、作品の投げかける主題を批判的に見る視点を失うとして、主人公に問題行動をとらせたり、あらすじの一部を芝居の途中で説明してしまったりして、時々観客に冷水を浴びせる手法を導入した。これはアリストテレスの「同化」に対して「異化効果」と呼ばれ、今やヨーロッパの演劇・映画では、しごく当たり前に活用されている。
　だが、日本では相変わらずハリウッド映画流の、同化できる格好いい主人公とともに物語の世界を旅して溜飲を下げる作品が主流といえようか。

4. 家族は作るもの――是枝裕和『万引き家族』

映画関係の企業に就職した僕のゼミの卒業生が、映画館で研修を受けた。ちょうどそのころ是枝裕和監督の『万引き家族』（2018 年）が、カンヌ映画祭でパルム・ドール大賞を受賞し、日本の映画館も大入りとなった。ところが彼曰く、「上映が終わって、映画館を出ていく人たちが一様に怪訝そうな顔をしている。ハリウッド映画の観客と全然違うんです」と。

開幕は柴田治（おさむ）（リリー・フランキー）と息子の祥太（しょうた）（城桧吏）がスーパーで万引きするシーン。父子でみごとな連係プレー、しょっちゅうやっているのだろう。帰り道、団地の廊下で凍えている女の子を家に連れて帰る。木造のすごい家、散らかり放題、臭（にお）いがしてきそうなあばら家だ。そこに治の母の初枝（樹木希林）、妻の信代（安藤サクラ）、その妹亜紀（松岡茉優）と、一家 5 人が暮らしている。

女の子の名はゆり、ふと見ると体のあちこちに傷がある。DV（ドメスティック・バイオレンス）か。コロッケを食べて寝てしまったゆりを彼女の家までおぶっていくと、両親が喧嘩している声が聞こえる。また連れ帰る。その晩、ゆりはおねしょをする。「ごめんなさい」と 3 回も言う。

早朝、まず治が職場へ。建築現場で日雇いをしている。信代はクリーニング工場で働いている。服のポケットに入っていたものをくすねる。祥太は小学校へ通わず、押し入れで本を読んでいる。「家で勉強できない奴が学校へ行くん

だ。」駄菓子屋で万引きをする。それをゆりが見ている。

初枝が銀行のATMで年金を下ろす。自分を捨てた夫のお陰で、死ぬまで年金がもらえる。亜紀とおしるこ屋へ行く。亜紀の職場はJK見学店、ちょっとおっぱいを見せて3,000円だ、と。この家族、やたらと金の話をしている。皆、バラバラの生活、夕飯に食べているものもバラバラ。

父子は釣り道具屋でも万引き、ゆりもそれを手伝いはじめる。しかし祥太は不満、二人だけでできるのに。治は「ゆりも何か役に立った方が、あの家にいやすいだろ」、ゆりは祥太の妹なんだから。けれども、祥太は治をなかなか「父ちゃん」と呼べない。と、なるほど、二人は血のつながった親子ではないらしい。

祥太がスイミーの話をする。国語の教科書に載っていた、小さな魚たちが大きなマグロをやっつける物語。テレビにゆりが映っている。2カ月以上行方不明なのに、捜索願いが出ていない、両親が殺したと疑われている。だが、ゆりは髪を切ってもらい、皆からかわいいと言われて、笑顔になる。最初は厄介者と思われたゆりが、だんだん家族の一員になっていく。

物が散乱している茶の間で亜紀が治に聞く、「信代さんといつしているの？」治は、そういうのはない、「ここ（心）でつながっている、ここ（股間）じゃない」と。「嘘臭」、「お金（でつながっているんでしょ）」。また、汚ったない風呂で、信代とゆりが腕の火傷の痕を見せ合う。信代にもDVを受けた過去があった。信代が、叩かれるのはゆりが悪いんじゃないと言って、彼女をぎゅっと抱きしめる場面では、信代の頬に涙が伝わり、それをゆりが拭く。

ストーリーで観客を引っ張っていく作品にあらず。むしろ小さなエピソードを連ねて“万引き家族”の生活ぶりを観客に観察させる。その挿話がひとつひとつ、実に丹念に作りこまれている。

駄菓子屋で祥太がゆりに万引きをさせる。すると店の親父が祥太に菓子を差し出し、「妹には（万引きを）させるなよ」と、優しく語る。老店主役の柄本明が、チョイ役ながらいい味を出している。

初枝が元夫の後妻の息子夫婦の家で、仏壇に手を合わせている。月命日だか

らちょっと寄っただけだと言うが、どうやらちょくちょく金をせびりに来ているらしい。裕福そうな中流家庭、長女はオーストラリアに留学中だというが、写真を見ると、なにっ、亜紀じゃないか！

JK 見学店で、亜紀が常客の“4 番さん（池松壮亮）”を割り増し料金のトークルームに誘う。彼を膝枕し、亜紀がしゃべる。男はしゃべらない。手に殴った痕、自分を殴った。男の涙が亜紀の太ももにつく。亜紀が彼を抱きしめる。男は言語障害だった。仮初（かりそめ）の愛を売る風俗店で、寂しい者同士の心が共鳴した。

時は夏の昼間、治と信代がそうめんを食べている。信代は白いスリップの下に柄物のブラジャーとパンティ。クリーニング店を解雇された、その退職金で買ったらしい。化粧もして、フフッ、誘ってる。でも煮え切らない治に、信代の方からキスし、さらに彼の上にのしかかる。雨の中を祥太とゆりが家へ急ぐワンカット。ふたたびカメラが家に戻ると、ちゃぶ台の上のそうめんがこぼれている。スッポンポンで 1 本のタバコを吸う男女。治が鼻歌を歌いながら、「できたな」と嬉しそう。この二人、初めてなのか、長い間ご無沙汰だったのか？　いや、治と信代はほんとうに夫婦なのか。是枝はすべてを明かさず、疑似家族の人間関係を観客に想像させる。二人がもう一回戦という気になったところで、子供たちが帰ってくる。あゝ、お邪魔虫。

と、ハリウッドの美男美女のベッドシーンとは異なる、しかし心の交流を描いて、泥臭くもステキな濡れ場が二つ続いた。

夜、初枝と治が縁側でビールを飲んでいる。隅田川の花火の音が聞こえる。だが、四方をビルに囲まれた路地裏の平屋からは花火は見えない。それでも気分はファンタスティック。

皆で電車に乗って、海水浴に行く。明るい場面。浜辺で信代が「血がつながってない方がいいってこともある」と話し、初枝が「余計な期待しないだけね」と応える。老婆は波打ち際で遊ぶ家族 5 人の姿を、嬉しそうな、満足そうな顔をして眺めている。実に自然体の、演技ともいえない演技。樹木希林曰く、計算は何もしていない、いろいろな思いが垣間見えるように監督が撮ってくれた、と（『万引き家族』劇場公開時パンフレット）。すでに全身癌に侵され

ていた樹木は、『万引き家族』封切りの 3 カ月後に、75 年間の旅を終えた。

だが、メルヘンのようなシーンの後、初枝が息を引き取る。救急車を呼ぼうとする治を信代が止める。「もうちょっとそばにいてあげようよ」、そして老婆を家の床下に埋める。「またこんなことするなんて」、「あの時とはずいぶん違うよ」。へへエ、怖くなってきたぞ〜。

信代が銀行から初枝の金を下ろす。11 万 6 千円。家の中からも 15 万円出てきた。喜ぶ治と信代、それを見ている祥太が複雑な顔をしている。息子は駄菓子屋の親父の一言以来、だんだんと大人たちがやっていることに懐疑的になっていた。その駄菓子屋に「喪中」の貼り紙。祥太はスーパーで万引きをしようとし、店員に追いかけられて、けがをする。

警察に聴取された万引き家族は、祥太を見捨てて夜逃げしようとする。だが、家を出たところで警察のライトに照らされ、お縄となる。

是枝監督曰く、この映画に貧困家庭や社会の最底辺を描こうという意図はなかった、むしろ 10 年くらい考えてきたことを全部作品に込めようとした、と（同パンフレット）。そう、これまで是枝は一貫して“家族”を題材にし、家族は最初から在るものではなく、人が作るものではないかと問うてきた。そのために彼は、いつも特異な家族を設定する。例えば出産時の病院で取り違えられた子供を育てた 2 つの家族が、それが発覚した 6 年後にどうするかをドキュメンタリータッチで追った大ヒット作『そして父になる』（2013 年）。階級の異なる両家の父親を福山雅治とリリー・フランキーが演じて、家族観や人生観の幅の広さを実感させてくれた。

『万引き家族』は是枝映画のひとつの集大成である。ただし今回はドキュメンタリー風ではなく、寓話調にタッチを変えた。

警察の取り調べで、さまざまな事実が明るみに出る。治の本名は榎勝太（しょうた）、信代は田辺由布子、彼女の前夫を殺して埋めている。殺さなかったら、二人ともやられていた、判決は正当防衛だった、と。治はゆりの件を、あれは誘拐じゃない、腹をすかせていたのを見かねた、身代金も要求していない。亜紀は、お祖母ちゃんに一緒に暮らそうと言われたと語るが、初枝が亜紀の両親から金を

もらっていた事実を知らされて、動揺する。

初枝の遺体が発見される。信代は、自分がひとりで初枝を埋めたと証言する。治は、祥太には万引きしか教えることがなかった、と。子供には自分の本名を名乗らせた。その祥太は施設に保護されて学校に通えるようになり、ゆりは両親の家に戻った。だが、彼女の母親は、夫からDVを受けたのであろう顔の傷をゆりに触られて、うっとうしがる。信代とゆりがいつぞや風呂の中で腕の火傷を見せ合った場面と好対照をなす。

若い警官2人の尋問はいわば“正論”、しかしキレイごとばかりではないこの世の中、その正論が偽善的に響く。信代が婦人警官から、子供には母親が必要よと諭(さと)され、反論しているうちにだんだん答えられなくなる。涙を拭き、髪をかきあげる姿を、真正面から、長回しの一発撮り(ファースト・テイク)でカメラに収める。是枝が師と仰ぐイギリスのケン・ローチ監督がそのカットを絶賛し、是枝がそれをとても喜んでいた（是枝裕和・ケン・ローチ『家族と社会が壊れるとき』）。

映画の基調はおとぎ話風、でも甘すぎないのは、役者たちの演技にリアリティがあるから。とくに取調室での安藤サクラの演技を超えた感情の表出と、それを引き出した是枝演出、さらにつかこうへいほど激烈ではないが、やはり毒がある、世の正論への監督の深い憤りを感じるから。是枝は、東日本大震災以降、世間で家族の絆が連呼されることに居心地の悪さを感じていた、と（前掲のパンフレット）。しかり、しかり。

治と祥太が刑務所の信代に面会に行く。治には前があるから、あたしがかぶった、楽しかったから、これでもお釣りがくるくらいよ。そして祥太に、あんたを拾ったのは、松戸のパチンコ屋、習志野ナンバーの赤い車、その気になれば本物の父ちゃんと母ちゃんは見つかるから、と。信代はそれを言うために、面会に来させた。

雪の日、祥太が一人暮らしになった治のアパートに泊まる。二人でカップ麺をすすり、雪だるまを作り、ひとつ布団で寝る。「父ちゃんさあ、おじさんに戻るよ。」翌朝、バス停で祥太は「わざと捕まった」と告げる。黙ってうなずく治。子供は犯罪を繰り返す生活を脱して、成長することを望み、実際徐々に

成長しはじめた。祥太の乗ったバスを、治が追いかける。ヘッヘッヘッ、定型の映画なら、父親が乗ったバスを子供が追いかけるんだけど。ステレオタイプをひっくり返して、切なくも笑える場面。

けれども終幕は、アパートの廊下でひとり遊ぶゆりが、外を見る寂しげな顔のアップで、ブラックアウト。答えのない世界への入口で、観客を放り投げる。

およそどの人物にも完全には共感できない群像劇である。すぐに感情移入できる圧倒的な主人公と一緒に物語の世界を漫遊する、そして解答はすべて作り手が用意してくれるハリウッド映画とは対極。しかしこの異化された、いろいろな解釈ができる、結末が観客に開かれている作品も悪くない。僕は見終わると悶々(もんもん)とした気分になってくる是枝の映画がとても好きである。

5. 文学の真価——カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』

カズオ・イシグロが『日の名残り』(1989 年)で大ブレイクした時、まさかノーベル文学賞を受賞するほどの大作家になるとは思わなかった。たしかに端正で美しい、そしてイギリス的な美徳をかの国の人々がこそばゆく感じるほど称揚する大ベストセラー小説を書いて、人気作家となったわけだが、しかしどこか器用な書き手という印象を免れなかった。

だが、『わたしを離さないで』(2005 年)は、21 世紀の人類が抱えるであろう医学・科学と人間との共存ないしは相剋という重要なテーマを小説という形で描ききって、深さと奥行きのある創作物となっている。これぞ芸術!

3 部構成の第 1 部。物語の語り手たるキャシー・H は、今 31 歳、提供者の介護人を 11 年以上やっているという。回復センターでルースやトミーと再会した。キャシーが二人と一緒に過ごしたヘールシャム(Hailsham)時代の回想を始める。

全寮制の学校ヘールシャムでは、毎週のように健康診断があった。トミーはいじめられっ子で、時々癇癪(かんしゃく)を起こした。態度が悪い、わざと稚拙な絵を描く。でもブルドッグを思わせる体形のルーシー先生から無理に絵を描くことはないと言われて、落ち着いた。

子供たちは絵や詩などの創作を奨励され、出来のよい作品はマダムが持っていく。どこかに展示館があるという噂がたつ。マダムとは何者か。生徒たちはちゃんと教わっているようで教わっていない。自分たちの将来のこと、提供のこと。主任保護官のエミリ先生は高齢だが、背筋を真っ直ぐ伸ばして歩く。少なからず威圧感があったが、ヘールシャムの安全は彼女がいるからこそ守られていた。

と、イギリスの上流階級の子供たちがよく入る寄宿学校の話のようでいて、なにやら謎めいている。保護官たる先生たちに大事に育てられ、しかし自分たちは外部の人間とは違う存在のように思えてならない。

キャシーがジュディ・ブリッジウォーターの『夜に聞く歌』というアルバム（架空）のカセットテープをなくしたことがあった。その3曲目に「わたしを離さないで」が入っていた。何年か後に、トミーと二人で同じテープを見つけた。イングランドの東端の僻地ノーフォークの海岸沿いの町で。外の世界を知らない子供たちは、そこを「イギリスの遺失物保管所」で、国中の落とし物が集められる場所だとジョークを飛ばしていた。

ヘールシャムでの最後の数年間、13歳から16歳で巣立つまでに、生徒たちはいろいろなことをはっきりと教わった。自分たちに老年はない、赤ん坊は産めない。ルーシー先生は「いずれ臓器提供が始まります。あなた方はそのために作られた存在で、提供が使命です……あなた方は一つの目的のためにこの世に産み出されていて、将来は決定済みです」と。

英米文学者の柴田元幸が、読みはじめる前に予備知識が少なければ少ないほどよい作品だと述べているが、僕はこの小説がクローン人間の話だとはどこかで聞いて知っていた。「嫌だなあ、時流に乗った小説かあ⁈」と、買ったまま本棚に置きっぱなしにしていた本。しかし、いざページをめくると、それはセンセーショナルな現代文明批判の書とは対極。抑えの利いた、練り上げられたことばで静謐（せいひつ）な物語を綴っている。文学っていいなと実感させてくれる作品に仕上がっている。

性教育が始まる。性病に気をつけろ、慎重に相手を選べ。また、セックスは

しておかないと腎臓や膵臓(すいぞう)が正常に機能しないとの言説もあった。トミーとルースは6カ月ほど付き合って、仲違いした。ルースの後釜はキャシーだと噂になった。だが、キャシーはルースから、トミーとよりを戻すための口利きをしてほしいと頼まれる。あゝ、三角関係。

こうしてキャシーたちのヘールシャム時代が終わる。彼ら彼女らは、きちんとした(リスペクタブル)、教養を重んじる、感情を露(あらわ)にしない、分別をわきまえた、イギリスの中流以上の人々が美徳と考える姿勢態度を身につけて、寄宿学校を去っていった。

第2部。ヘールシャムの卒業生のうち8人は、廃業した農場を利用したコテージで生活をしはじめた。そこで2年以内に論文を書く課題を与えられ、キャシーはヴィクトリア朝の小説をテーマに選んだ。保護官はいないが、皆節度ある行動をとる。朝食の雰囲気はいつも高尚。トミーとルースは元のさやに収まり、周囲からは安定したカップルに見えた。

キャシーとルースは毎晩屋根裏の部屋で話し込んだ。キャシーは一夜だけの関係をつづけざまにもった。彼女は時々セックスをしたくてたまらなくなる。

ある時、車でノーフォークへルースのポシブルを探しに行くことになった。自分たちはそれぞれ誰かから複製された存在、「親」がいるはずだ、その可能性がある人をポシブルと呼んでいた。その折、先輩から聞かれた、ヘールシャムの出身者は心底から男女が愛し合い、それを証明できれば、提供を猶予してもらえるって本当か、と。

キャシーとトミーが中古品店でジュディ・ブリッジウォーターのカセットテープを見つけたのも、この小旅行の折だった。ノーフォークはイギリスのロストコーナー。トミーが昔エミリ先生に、絵や詩はそれを作った人の内部をさらけ出す、と言われたことを思い出す。彼が絵を描きはじめる、それは金属的な空想動物の絵だった。

トミーとルースは本当に愛し合っているのか。ひょっとすると提供を猶予してもらうためという心理が働いていないか。ルースとキャシーもすべてを口にしているようで、そうでもない。お互いに相手を気遣い、また自らの保身やエ

ゴも垣間見せる。

イシグロは人間誰しもが経験しそうな、青春時代の小さなエピソードを連ねていく。彼はクローン技術の進化には興味がないという。むしろ人間のようで人間ではない、人間の外部に存在する生きものの、思いやりや嫉妬心や対人関係の悩みなどを、抑制の利いた筆で綴る。もっと刺激的に、通俗的に盛り上げようと思えばいくらでもできるのに、それをしない。最も節度を保っているのは、作中の登場人物たちよりも作者自身といえようか。

キャシーはトミーとルースの間に割り込まぬよう、介護人の訓練を受けたいと申し出て、コテージを後にする。

第3部は現在。巻頭に「1990年代末、イギリス」とあるから、このSFみたいな小説は、未来の話ではなく、近過去の物語になる。すでに人類はクローン羊を産み出していた。ただし、場所も固有名詞も架空のものが多い。カズオ・イシグロの常、事実に則らない、しかし綿密に考え抜かれた彼の想像の世界が展開する。

キャシーは介護人に向いていた。提供者には遅かれ早かれ使命を終える瞬間が来る。それを見守る孤独な仕事に耐えられる。ルースの最初の提供はひどかったらしい。また、ヘールシャムが閉鎖されたという。キャシーはルースの介護人になったが、必ずしも信頼し合う関係は築けずにいた。

キャシーの語りには、多分に彼女の主観が入る。語り手の話が信用できない、記憶も定かではない――これもイシグロの常道である。彼はあいまいな世界を語れることこそ、フィクションの存在意義だ、と。そして、おぼつかない話を、熟慮した信頼できることばで書き記す。

トミーは設備の後れたキングスフィールドの回復センターにいた。キャシーはトミー、ルースと一緒にそのセンターのそばの湿地に座礁している船を見に行く。廃船の風景は、さながら臓器を提供するクローンたちの心象風景である。

途中、体力の衰えたルースは有刺鉄線をくぐるのに苦労した。船の見える沼地にたどり着くと、閉鎖になったヘールシャムも、今はこんなふうなのかな、と。よく知る提供者たちがあちこちでその使命を終えたという話になる。

ルースが告白する。カップルになるべきはキャシーとトミーだった、なのに私があなたたちの仲を裂いたの、と。彼女はキャシーに、トミーと提供猶予の申請をしてくれと言って、探し当てたマダムの住所を書いた紙を渡す。キャシーは思う、三人の関係はいつも壊れやすくて微妙、私は緊張していた、でも不快な緊張ではなかった。

そのドライブによって、キャシーとルースの間の警戒と不信の念が消えた。二人の間の最良の一時期が訪れる。キャシーはルースの介護人として、彼女を看取った。

船を見に行った日から１年後、キャシーは三度目の提供をしたばかりのトミーの介護人となる。ある日の午後、彼女は手を回復途中のトミーのＴシャツの下に滑り込ませ、手ですませてあげた。彼は安らいだ表情をしていた。やがて二人は普通のセックスをしはじめ、さらにすべての抑制を取り払って、あらゆる行為をするようになる。だが、大きな幸せを覚えるとともに、トミーはようやく今になってという悲しみも感じているようであった。

厳しい現実の中での切ないラブストーリーを、イシグロは静かで冷静（クール）なタッチで描く。ステキ！

キャシーとトミーが意を決して、マダムに会いに行く。マダムことマリ・クロードの家に通されると、そこには車椅子に乗ったエミリ先生がいた。エミリ先生は二人の質問に、提供猶予の話はただの噂で本当ではないと答える。生徒たちの作品を持っていったのは、あなたたちにも魂が、心があると思ったから。ヘールシャムを作ったのは、医学のための存在、試験官の中の存在だったあなたたちでも、人道的で文化的な環境で育てれば、感受性豊かで理知的な人間になれることを世界に示したかったからだ、と。

戦後、科学は急速に進歩し、不治の病が治癒する希望が出てきた。でも、それには臓器が必要。クローンがこの世に生み出されるべきか考えるようになった時は、もう遅すぎた。「こういうことは動きはじめてしまうと、もう止められません。」世間はあなた方のことを考えまいとした。トミー、あなたの人生は決められたとおりに終わる。それを受け入れなければ。「あなた方は、変化

する流れの中のいまに生まれたということです。」

残酷な話である。科学の進歩の裏側、傲慢な人間たち。これ、いくらでも敷衍(ふえん)できそうだ。食肉用の家畜、掛け合わせを繰り返すペット、ともすれば日陰に追いやられる障害者や老人たち、さらにさまざまな機械に管理されている全人類にも。21 世紀、科学と医学は加速度的に前進し、もはや止められないところに来ている。そんな激流の中に我々は生きている。

小説はキャシーとトミーがエミリ先生と対話する場面がクライマックスである。けれども、イシグロの筆致はここでも抑制され、そこで発せられるメッセージが前面に押し出されることはない。この小説の真価は、現代社会への警鐘にあるわけではない。

帰り道、キャシーは裏道ばかりを選んで走った。介護人がしばしば利用する、世界の裏側のとりわけ暗い道。と、トミーが車から降りて、荒れ狂うように叫ぶ。前述したとおり、感情を表に出さず、常にクールでいるのが、イギリスの教養ある人々の善しとするところである。しかし、イシグロはここで 1 度だけトミーに思いきり叫ばせた。キャシーが彼を抱きしめる。

トミーは 4 度目の提供で、使命を終える。その 2 週間後、キャシーはノーフォークまでドライブをした。彼女は車の外に出て、数本の木と有刺鉄線にごみやビニールシートがはためいている景色を見る。無機質な情景。キャシーが車に戻り、行くべきところへ向かって出発して、現代の寓話の幕が下りる。

イシグロは、自分たちの運命を恨まず、静かに己の使命を果たそうとするクローンたちの心情を、通俗に堕することなく、激することなく、濃(こま)やかに描写する。そこには安直な救いや癒しや、涙させる場面もない。人生は悲劇ではない、生きることは辛くとも、それ自体価値がある。

クローンたちの生きざまを、普通の人間と同じ青春物語として活写することによって、現代を生きる人々へのメッセージを、声高に主張することなく、たおやかに穏やかに伝える。イシグロは読者の知性を信じ、書き手と読み手の間に親密な関係を築きながら、密(ひそ)やかな声で誠実な物語を綴る。彼は器用を超える筆遣いのできる作家に成長した。

※引用は、カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』（土屋政雄訳、早川書房、2006年）より。柴田元幸の言は、その翻訳本の巻末の解説から。

おまけ

落穂拾いをしながら、現代について考えた。

21世紀、アフリカは相変わらず荒れている。この原稿を書いている時、スーダンで内戦が始まった。武器を売る闇商人は後を絶たず、先進国の資本家たちによる地下資源の争奪戦も、フレデリック・フォーサイスが怒りを込めて書いたころより、さらにひどくなっている。

薫君4部作を書き上げて小説の筆を折った庄司薫は、1995年に「四半世紀たってのあとがき」（新潮文庫版『赤頭巾ちゃん気をつけて』所収）でこう述べている。優勝劣敗の法則をいかに緩和するか、あのころは情状酌量の余地がかなりあった。当時、科学技術の領域には、まだ希望的留保を支えるなにかがあったから、人類は無限に弱者救済を貫けるかもしれない、世界中の「飢えたビアフラの子供たち」を明朗闊達（かったつ）に救い続けることができるかもしれないと思われた、と。

だが庄司はそのあとがきで、20世紀末以後の世界の見通しについては、ほとんど口を閉ざしていた。

僕は、根拠のない“進歩史観”が嫌いだ。いや、僕の好き嫌いを越えて、それは危険極まりないと信じている。民主主義はますますフィクションとなり、資本主義は格差社会を助長してはばからず、科学技術も負の側面を露呈している。いくら明るい夢を語っても、すでにその銀メッキははがれている。

なのに、荒唐無稽なヒーローにしがみつこうとする大衆をブラックに嘲笑するつかこうへいの芝居を見て、それは自分たちの意識の低さを諷刺しているのだと受け止める観客は少ない。“脳内お花畑”が流行（はや）る今日このごろ、主体性と危機意識の欠如は度を越していると言わざるを得ない。

よき人間関係は自分たちで構築するものであって、アプリオリに存在するも

のではない。それを「家族」という、多くの人々にとって生まれて最初に所属する「共同体」を題材にして描こうとする是枝映画。いや、家族だけではない、職場の同僚も親しき友人も愛する恋人も、対人関係は全部自分たちでせっせと作るもののはず。今やスマホが第一次欲求となっている時代、あのちっちゃい画面でカチャカチャやることで、真の人間関係が築けるものだろうか。スマホは進化し、しかしそれで人と人との交流がよりよい方向へ進むとは僕には到底思えない。

科学と医学は、青髭たり得るか、我々は現代を、そして未来を愛せるか。進歩史観を拒否する僕にとって、しかし激変する時代と自らの運命を受け入れ、黙々と自身の使命をまっとうしようとする若者たちの姿には、我もかくありたしと憧憬を覚える。それは暗い現代を照らすささやかな道しるべの灯火（ともしび）、その存在に励ましと、そして文学の力を実感させられる。

さて、来春で僕は“シーシュポスの岩運び”を終える。僕の仕事部屋の本棚には、買ったまま読んでいない書物がたくさんある。その本たちがあっちからもこっちからも、「早く俺を読め」と呼びかけてくる。はいはい。“サンデー毎日”になったら、窓辺の陽だまりで読書三昧の日々を送ることにいたしましょう。余生は貧乏な極楽トンボよろしく、古典を味読しながら、心穏やかに過ごしたいと考えています。

お先に失礼いたします。皆様のご健勝とご健闘をお祈り申し上げます。

（2023 年 5 月 脱稿）

（了）